

蟲吹

どのいとあはれげなるえだども、とりもてまいる、きりのまよひは、いとえんにぞ見えける。

〔日次紀事七月〕此月略中 入夜點火於叢間而執松蟲并鈴蟲是謂吹蟲。執後養紗囊竹籠之内、近年

相國寺及建仁寺松林亦多、入夜人群聚聽之、下鴨社司細割竹而造飼蟲籠、別以紫白絲造藤花垂其

上、籠中小管内盛土種露草是號松蟲籠而贈堂上并地下、

〔貞徳文集〕晚景虫吹。可罷出候、黒月闇無用心候得共、益前者墓參仕者繁候而、路次賑敷候、行燈挑燈

聚置候得者、促織、松虫、鈴虫、蜚幾等も寄聚候、

〔嬉遊笑覽禽十二〕按るに虫吹とは、今も虫を取に、竹筒のかた方に、紗のきれを冒ひ、これをもて虫を

覆へば、虫は上のかたに飛のぼるを、籠また袋などに、筒さきをむけて、冒たる紗のうへより、息

して虫を吹こむなり、

放聽
蟲

〔古今著聞集草十九〕天祿三年八月廿八日、規子内親王野々宮にて、御前の面に薄蘭、紫苑、單香、女良花、

萩などをうへさせ給て、松むし鈴むしをはなたせ給けり略中 草をもうへ、虫をもなかせたり、お

ほせごと、て、花のあり様むしのすみか、何れもくいとおかしかりけり、

〔源氏物語鈴虫三十八〕秋比にしのわた殿のまへのなかのへいの、東のきはを、をしなべて野につくら

せ給へり略中 この野にむしどもはなたせ給ひて、風すこし涼しくなり、行夕暮に、わたり給て、虫

の聲き、給ふやうにて、なを思はなれぬさまを聞えなやまし給へば、例の御こゝろはあるまじ

きことにこそあなれど、ひとへにむつかしきことに思聞え給へり略中 虫の音いとしげうみだ

る、ゆふべかなとて、我もしのびてうちすし給、あみだの大ずいとたうとくほのくきこゆ、

〔古今著聞集和歌五〕東三條院皇太后宮と申ける時、七月七日撫子あはせせさせ給けり略中 瑠璃の

つばに花さしたる臺に略中 むしをはなちて、
松虫のしきりにこゑの聞ゆるは千世をかさぬるこゝろなりけり